

矢板の工場紹介

市内には技術力や業界シェアが高い工場が多く存在します。よく名前を聞く会社だけど仕事内容・技術力は知らない…なんてことはありませんか？皆さんが知っているようで知らない市内工場の魅力をお伝えします！

日本の山を再生するために！ 株式会社トーセン

低迷する製材業界の中で、独自の物流システム、独自の物流システムによる地域経済の活性化にチャレンジし、現在では国産材製材で日本一となった(株)トーセンの東泉清寿社長とエネルギー事業部の橋本真理子さんにお話を伺いました。



●林業のまち矢板

矢板市は製材の材料となる山林が多かったこともあり、昭和三十年代には四十軒を超える製材業者があり、「林業のまち矢板」と呼ばれていました。しかし、安価な外国産材の輸入や木造住宅の減少などにより市内の製材業者は現在七軒まで減り、製品品質向上、コスト削減、製品の安定供給が課題となってきました。

材業者は現在七軒まで減り、製品品質向上、コスト削減、製品の安定供給が課題となってきました。

●会社の概要は？

昭和三十九年に東泉製材所として送材車一台で先代社長が創業し、平成元年に現在の社名に変更しました。平成二十六年に創業五十周年を迎え、栃木県をはじめ関東や東北に二十三の直営および提携製材工場があります。平成十九年に「母船式木流システム」と呼ぶ独自の流通システムを確立し、また製材の過程で発生する端材や細かたまり、曲がったりして製材に向かない間伐材などを有効活用するために、「木質バイオマス事業」を平成二十五年に始めました。

●「母船式木流システム」とは？

このシステムは、まず山林に近い製材工場で原木の調達や製材・選別工程を行います。次に、製材・選別された木材は、母船工場と呼ばれる拠点に集結され、木材の乾燥工程や仕上げ加工、出荷までを行います。この方で効率よく行うことにより、

り、生産性の効率化、製品の品質向上、コスト削減、製品の安定供給が課題となってきました。



●「木質バイオマス事業」とは？

以前行われていた製材方法では、木材の幹の部分を中心に利用していたので、端材が多く発生したり、製造コストが高くなるなど、さまざまな面で無駄がありました。それらの無駄をできるだけ少なくすることを目的に木質バイオマス事業を始めました。製材をする際には、樹皮やおがくず、木端と呼ばれる切れ端など多くの端材が発生します。節や虫食いなどの多少の欠点

を持つ材はその部分を取り除き集材材として、おがくずや木端は木材を乾燥するためのボイラーの熱量として、木質チップは発電所で活用しています。

また、木材乾燥ボイラー余剰熱は、地域の組合に供給し、マンゴーやコーヒーマンゴーのハウス栽培に利用されるなど、地域の新たな産業の発生や雇用の創出に期待されています。

●現在、力を入れていることは？

ヨーロッパの国々のように森林産業を豊かにしたいと考えています。日本では山林を所有している方も資産として有効活用されていないのが現状です。せっかくの資産である山林資源を有効に活用できるような仕組みを推進していきたいです。その一つとして、矢板市木の駅プロジェクト実行委員会が主催している「木の駅プロジェクト」にも協力しています。

●「木の駅プロジェクト」とは？

山林には細かたまり、曲がっていたりして建材として利用できない木材

が放置されています。これらの放置された木材を「木の駅」に搬入すると、地域商店で利用できる地域通貨(一トンあたり五千円前後の商品券)と交換するという取り組みです。搬入した人は地域の商店で買い物することで地域経済に貢献でき、搬入した木材も前述したようにさまざまな方法で活用することが出来ます。放置された木材も山林から無くなることでキレイになりますので、環境整備にもなります。山林をお持ちの方にはぜひ利用していただけたらと思います。

(記者の感想)

社長自らヨーロッパ各地に何度も出向いて、海外の製材業界の勉強をし、日本の製材業界に取り入れようという探究心と行動力が会社経営を安定させたのだと感心しました。(K・H)

●問い合わせ

(株)トーセン
電話：(四三) 八三七九
木の駅プロジェクト事務局
(株)山光
電話：(四三) 一六八八